

川成 洋, 坂東省次 編

『バルセロナ散策』

(行路社)

スペインのバルセロナといえば、ピカソやダリ、ガウディなどの芸術家を輩出して参りました。

またオリンピックを開催した街としても記憶に残っている方も大勢いらっしゃるでしょう。この本は、そのバルセロナを芸術的、また歴史的、文学的などさまざまな側面から考察しています。バルセロナの街を育んできた背景からその真の姿に迫る読み応えのある1冊です。

293.6-Baru (S.S.)

金田一 春彦 著

『ホンモノの日本語を話していますか?』

(角川書店)

私たちは普段、何気なく日本語を使っています。ネイティブが喋るのだから「ホンモノ」だと思ってしまいます。しかし本当にそうでしょうか。金田氏は日本語の特徴に始まり、「日本語に表れる日本人の性質」をも判りやすく解説しています。本書を読んで「本物」に迫りましょう。全ての外大生におススメです。ところで日本語の九九を英語では何というか、考えたことがありますか?

810.4-Kin (T.F.)

江口裕之, ダニエル・ドゥーマス 著

『英語で語る日本事情』

(ジャパンタイムズ)

花粉症、回転寿司、学級崩壊、ひきこもり、援助交際などを英語できちんと説明するにはどう言えばいいのでしょうか。

外国で紹介される生け花や茶の湯、禅、相撲などの「異国情緒」的な伝統文化ばかりでは現代日本人の生活や文化は説明できません。日本事情を正しく伝えるためには、その「伝統文化」と「現代文化」の両側面からとらえることが大切で、本書は現代日本事情紹介のための、あるいは「通訳ガイド試験」のための参考として非常に役立ってくれるでしょう。 302.1-Egu (S.N.)

谷崎 竜 著

『上海リスボン街道 旅はやっぱりドミトリー』

(連合出版)

日常の中でいつの間にか感激に疎くなり、どこか事務的に生きていたと思っていた著者が、「ユーラシア大陸」の横断を考えて実行した記録です。

横断ルートは、中国 - パキスタン - インド - トルコ - ヨーロッパ - 終点リスボンまで約100日間におよぶ、各地域を見て、聞いて、食べて、感じたことが書かれており、これから自由な旅を考えている皆さんにお薦めの一冊です。

290.9-Tan (N.I.)

藤井純夫 著

『ムギとヒツジの考古学』

(同成社)

記述の対象となる地域は西アジア、現在の中近東とほぼ同じ地域です。時代的には、ムギ作農耕の起源が紀元前8000年頃、ヒツジやヤギの家畜化が紀元前6500年頃とされ、本書では終末期旧石器文化の初頭(紀元前18000年頃)から都市文明直前(紀元前3000年頃)までを対象とし同地を考古学的、更には、自然環境からも知ることができます。

現在の西アジアの風景は、家畜、牧畜を思い浮かべますが、それらの起源がヤギやヒツジ等への狩猟から「囲い」のなかでの馴化と世代交代への移行であること等、考古学的な視点への入門書でもあります。 202.5-Seka-16 (S.O.)

